



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	九州オルレ体験を通じた大学生の意識変容に関する一考察 : 宗像・大島コースを事例に
Author(s)	仙波, 大海
Citation	Sauvage : 北海道大学国際広報メディア・観光学院院生論集, 22, 41-47
Issue Date	2026-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99266
Type	departmental bulletin paper
File Information	Sauvage22_41.pdf



九州オルレ体験を通じた大学生の意識変容に関する一考察

-宗像・大島コースを事例に-

仙波 大海

北九州市立大学 地域共生教育センター

1. 背景と目的

現代観光において、専門的な技術や高額な装備を必要とせず、日常生活の延長として誰もが実践可能な「歩く」という行為は、重要なツーリズムの一形態として定着している。このような「歩く観光」は、その目的やフィールドの特性に応じて多様に分類される。例えば、歴史的街並みや観光拠点を巡るまち歩き、田園地帯や海岸線など地域に存在するありのままの道を楽しむ英国発祥のフットパス、さらに森林や高山帯へと踏み込み、登頂や散策を目的とする登山やハイキングなどが挙げられる。これらの活動は、観光客が自身の関心や志向に応じて選択可能な歩行型観光の実践形態として、これまで各地で楽しまれてきた。

これらの活動は、健康増進や自然との触れ合い、さらには地域文化の学習といった多様なニーズに応えるものであり、現在に至るまで広く実践されている。そのような歩行を主眼とするツーリズムの一形態として、本研究が着目するのが、韓国・済州島発祥の「オルレ」である。オルレとは、創設者ソ・ミョンスク氏がスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路を訪れた経験に触発され、故郷である済州島において整備した歩行ルートである。「オルレ」は済州島の方言で「通りから家に通じる狭い路地」を意味し、民家の石垣道、海岸の岩場、森の小径などを結びながら構成されたトレッキングコースである。現在では、済州島本島を周回するコースおよび周辺離島において整備が進み、総延長約 437km、全 27 コースが設定されている（社団法人済州オルレ公式ウェブサイト, 2026）。

このように広範囲に整備されたオルレは、単なる歩行ルートとしてだけでなく、地域社会や観光構造に影響を及ぼす存在となっている。小笠原・中嶋（2015）は、オルレのコース特性により、従来は観光客が通過するのみであった地域においても経済効果が波及している点を指摘している。さらに済州オルレでは、済州島の自然環境を生かしたルート設定がなされるとともに、カンセと呼ばれる馬型のオブジェや、赤と青といったカラフルなリボン、矢印看板などのサインが随所に設置されている。参加者はこれらのサインを手がかりに歩行することにより、目的地への単なる移動ではなく、「道そのものを発見していく」という能動的な体験を重視する点に特徴がある。また、既存の観光ルートのみならず、地域住民の日常的生活道路や未整備の道も含まれていることから、観光地として過度に整備されていない自然や地域空間を活用した道としての性格を有している。

日本国内においては、2011 年の東日本大震災後、九州地方への韓国人旅行者数が減少したことを背景に、その対応策および新たな九州観光の魅力創出を目的として、2012 年に九州へ導入された（入江, 2019）。また導入にあたっては、九州観光推進機構が、韓国の済州オルレと業務提携を結び、コース設定や運営理念に関するノウハウの提供を受けながらルートの作成が進められた（李, 2019）。九州観光推進機構によれば、九州オルレとして認定されたコースは、2026 年 1 月時点で沖縄県を除く 7 県において計 18 コースが設定されている。また九州オルレでは、13 のルールを設けており、表 1 は九州オルレ公式ウェブサイトに掲載されている九州オルレのルールである。これらのルールは、歩行中の事故や怪我といったリスクを未然に防ぐための注意喚起にとどまらず、地域を歩く際に住民の生活を妨げないよう配慮する行動規範を含んでいる。すなわち、観光コースや山道のみならず、集落内の生活道路もコースに組み込まれている九州オルレの特性を踏まえ、歩行者に対して地域社会との共存を求める内容となっており、地域の日常空間を観光の舞台として位置づける点に九州オルレならではの特徴がある。

また国内では、九州オルレのほかに、宮城県が主体となって「宮城オルレ」が 2018 年に開始されている。宮城オルレにおいても、済州オルレに協力を得つつコース整備が進められており、現在までに計 7 コースが設定されている。済州オルレと九州・宮城オルレを比較した際の最大の相違点は、

その運営主体にある。済州オルレは非営利社団法人「済州オルレ」によって運営されており、民間主導で展開されているのに対し、九州オルレおよび宮城オルレはいずれも行政が中心となって整備・運営されている。このことは、日本においてオルレが地域振興や観光政策の一環として制度的に位置づけられていることを意味しており、住民の自発的な活動から発展した済州オルレとは異なり、公共政策として導入・管理される観光資源としての性格を有している。

表 1. 九州オルレのルール（九州オルレ公式 HP より引用）

・民家の庭にみだりに入らない。	・次に訪れる人のために、リボンを持ち帰らない。
・人や個人のを撮影するときは同意をもらう。	・道案内の看板にはさわらない。
・ゴミは必ず持ち帰る。	・未舗装の道は、決まった経路を通る。
・道沿いの農作物を勝手に採らない。	・風景を楽しみながらゆっくりと歩く。
・道端に咲いている花や木の枝を採らない。	・車道を歩くときは、車に気をつけて歩く。
・民家付近等で大声で叫んだり、騒いだりしない。	・コースから外れた急傾斜地等での危険な行動は控える。
・途中出会う旅行者や地元住民の方々と笑顔で挨拶を交わす。	

以上のようにオルレが国境を越えて展開されている一方で、参加者がオルレという歩行観光をどのように捉え、どのような経験として受容しているのかについては、必ずしも十分に検討されてきたとは言いがたい。とりわけ九州オルレは、当初、韓国人観光客の来訪促進を目的として導入された経緯を持つが、現在では日本人利用者の参加も増えつつあり、利用者層が多様化している。この点を踏まえると、九州オルレが日本における観光実践としてどのように受け止められているのかを検討するためには、日本人利用者に焦点を当て、その受容の様態を明らかにする必要がある。

オルレ参加者に関する先行研究として、まず済州オルレを対象とした研究が挙げられる。平野（2019）は、済州オルレにおいて季節変化に応じて異なる景観が楽しめる点に注目し、季節やコースを変えて繰り返し訪れる観光客が増加していることを指摘している。また、入江・小笠原（2023）は、コロナ禍の若者が気分の落ち込みを癒し、自己を見つめ直す手段としてオルレを選択した事例を報告している。これらの研究は、オルレが参加者にとってどのような価値や経験として認識されているかを示している点で重要である。

一方、九州オルレに関する研究は、その導入背景や観光戦略上の意義に関心が寄せられてきた。桔川（2019）は、九州オルレに多数の韓国人観光客が訪れている現状を指摘し、国際的な観光交流の場としての可能性に注目している。さらに、岡村・片桐（2024）は、九州オルレにも済州オルレと同様にリボンや「カンセ」といった標識が設置されており、済州オルレに慣れた韓国人観光客が違和感なく利用できる環境が整備されていることを明らかにしている。この点は、韓国人観光客の利用が一定程度みられる要因の一つを示唆するものである。

また、九州オルレを楽しむ国内観光客に着目した研究としては、渡邊・小畑（2015）が武雄市の九州オルレを対象に、オルレ導入が地域ブランド力の向上および知名度の向上に寄与し、その結果として国内観光客の獲得にもつながりつつあることを示している。また、慶田（2019）は、オルレが海外ブランドとして展開されつつある現状を指摘し、今後は韓国以外の外国人観光客の増加が期待される一方、日本国内の認知度が依然として高くないことを課題として挙げている。

以上の先行研究を整理すると、九州オルレに関しては、観光施策としての位置づけや地域ブランド戦略に関する知見は蓄積されつつあるものの、実際に九州オルレを歩いた参加者がどのように経験を意味づけ、どのような感情・認識を抱いているのかといった「参加者視点の経験」に焦点を当てた研究は、管見の限り十分に見当たらない。この点は、九州オルレの魅力や価値を理解する上で大きな研究ギャップであるといえる。

特に若者層は、歩行を主とする観光活動に参加し得る身体的条件を備えるとともに、コロナ禍を経て自然環境や歩行型観光への関心が高まっている層でもある。加えて、若者が抱く感情や気づきは、オルレ体験が持つ新たな価値を理解する上で示唆的であると考えられる。そのため、若年層が九州オルレという歩行観光をどのように受け止め、参加経験を通してどのような意味づけを行っているのかを明らかにすることは、九州オルレの魅力の一端を把握する上で有効な視点となる。

そこで本研究では、九州オルレに参加する若年層を対象に、彼らが参加経験を通してどのような

感想や認識を抱き、オルレという歩行観光をどのように受容しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法

本調査では、九州オルレの中でも福岡県宗像市に所在する宗像・大島オルレを対象フィールドとし、同コースに参加した大学生3名を調査対象とした。調査対象者は、それぞれ部活動やクラブ活動などを通じてスポーツ経験を有しているものの、オルレへの参加経験はなく、また宗像市大島を訪れること自体も初めてであった。調査は、筆者を含む計4名で2025年7月に宗像・大島オルレを体験した。歩行後、後日改めて対象者3名に対し、付箋を用いたディスカッションを行い、当日の体験を想起しながら、参加を通じて抱いた感想や印象について自由に語ってもらった。ディスカッションの内容は筆記記録として整理するとともに、参加者が記入した付箋についてもすべて回収し、分析データとした。

本研究では、これらの発話記録および付箋に記載された内容をテキストデータとして整理した上で、意味内容に着目してコード化を行い、類似する内容ごとに分類・整理した。さらに、それらの分類結果をもとに、オルレに対する受け止め方や意味づけの特徴を抽出した。

3. フィールド概要：宗像・大島オルレ

本研究のフィールドである宗像・大島コースは、2014年3月に宗像市大島において開設された。大島は、宗像市神湊港からフェリーで約25分の距離に位置する離島である。宗像市には、日本神話に登場する宗像大社が所在し、大島もまた、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の構成資産である宗像大社中津宮および沖津宮遥拝所を擁するなど、宗教的・歴史的背景を有する島である。

本コースは、フェリーターミナルを起点とし、御嶽山の原生林、風車展望所、海岸線などを巡る全長約11.4kmのルートで構成されている。歩行時間は4～5時間程度であり、九州オルレが設定する難易度区分では中～上級に位置づけられている。標高については、序盤に登る御嶽山が224メートルで最も高く、展望台からは周辺の島々や宗像市の市街地を一望することができる。その後も多少のアップダウンを伴いながら、森林部と海岸部を交互に通過する構成となっている。(図1及び図2) 離島という地理的条件に由来する閉鎖性と、世界遺産関連資産を含む宗教的・歴史的背景を併せ持つ自然環境の中を歩く点に、本コースの特徴がある。



図1 宗像・大島コースの様子①



図2 宗像・大島コースの様子②

4. 調査結果

宗像・大島オルレに初めて参加した大学生3名の発話記録および付箋データをもとに、体験前・体験中・体験後の3段階に分けて分析した。その結果について以下にて説明する。

4. 1 体験前：不安感と期待感の併存

参加前段階において、学生たちはコースの構造や環境条件について、期待と不安の双方を抱いて

いたことが確認された。調査が7月に実施されたことから、事前段階では、「熱中症や暑さをどのように乗り切るか?」といった気温に関する不安や、「ゴールまで歩き切ることができる体力が備わっているのか?」、終了後に「筋肉痛が生じるのではないか?」といった身体的負荷に対する懸念が多く示されていた。これらの発話から、オルレを未経験の活動として捉える中で、身体的な困難さを想定したネガティブなイメージが形成されていたことがうかがえる。

一方で、オルレが韓国発祥であるという程度の基礎的知識は有しているものの、具体的な内容については十分に理解していなかったため、「楽しみながら学びたい」といった発話がみられたほか、道を案内するカンセやリボンなどのサインを実際に見つけたいというポジティブな期待も確認された。さらに、同じオルレを歩く参加者との交流を通じて、なぜ人々がオルレを楽しんでいるのかを知りたいという発話もみられ、歩行体験そのものだけでなく、他者との関わりを含めた経験を想定していたことが明らかとなった。加えて、オルレへの参加を通じて、日常的な運動習慣の形成や、大島の自然環境や文化に関する知識の獲得を期待する意見も示されていた。これらのことから、参加前の段階において学生たちは、単なる運動体験にとどまらず、身体的活動を通じた学習や生活習慣の改善といった、より広い可能性をオルレに見出していたといえる。

4, 2 歩いてみて：身体感覚と環境認識の変化

4, 2, 1 地形・道の構造への気づき

歩行中の発話では、まず地形的な厳しさに関する言及が多く認められた。階段の多さやトレッキングコース特有の上り下りのきつさについて、「想像以上に距離が長かった」、「時間がかかった」といった発話がみられ、これらの表現から、事前の想定よりも身体的負荷が大きかったことが示されている。特に、登り区間においては脚への負担が強く意識されており、歩行の継続によって体力が消耗していく過程が具体的に語られていた。

また、コースの路面状況に関する発話も確認された。「舗装されている道」と「舗装されていない道」との差が大きいことが指摘され、人工的な道路と自然的な小径が連続して現れる構造が印象に残っていたことが分かる。発話から宗像・大島オルレは観光専用に均質化された道を歩くのではなく、地域住民が日常的に利用する生活道路や、未整備の自然地形を組み合わせで構成されたルートであることを、参加者が身体的経験を通して実感したことがうかがえる。

4, 2, 2 掲示物・サイン（リボン・カンセ）への評価

「目印」に関する言及は多く、「応援メッセージがうれしい」、「目印のリボンが綺麗な色」といった感想が示された。図3はカンセおよびメッセージサインを示したものであり、図4はリボンサインを示している。応援メッセージは、コース序盤の御嶽山の登山区間に複数箇所設置されており、自然環境の中で現在地や進行方向を把握するための目印として機能するだけでなく、歩行を継続するための心理的な支えとしても受け取られていた。特に「応援メッセージ」という表現は、サインを通じて「歩く行為」が支えられているという感覚を示しており、オルレが単なる移動経路ではなく、参加者との関係性を想定した仕組みとして構成されていることを反映しているといえる。

一方で、リボンサインが多数設置されている箇所では迷うことはなかったものの、「道が分からないうちがあった」という経験に関する語りも確認された。実際にサインの掲示頻度が場所によって異なっていたため、一度誤ったルートに入り込んでしまった事例が生じていた。その後、誤りに気づき正規のルートへ戻ることはできたが、正規ルート自体も草花に覆われており、人が通行した形跡が乏しかったため、当初は判別が困難であったと語られている。これらの発話は、サインが常に十分に機能するわけではない場面が存在することを示している。このことは、オルレが完全に管理された人工的空間ではなく、自然環境の中に設置された「不完全さ」を伴う道であることを意味している。学生はこの経験を通じて、サインの存在がもたらす安心感とともに、その不確実性に直面しながら自ら判断して進む必要がある点を認識したことが確認できた。



図 3 宗像・大島コースのカンセ



図 4 宗像・大島コースのリボンサイン

4, 2, 3 自然環境への感覚的な気づき

自然環境に関する発話も多数認められた。「自然に囲まれている」、「自然の音が聞けた」、「空気が綺麗だった」、「景色が綺麗だった」といった表現から、五感を通じた自然体験が強く印象に残っていることが分かる。特に道中では、トンボやチョウ、クモ、ウリボーなど多様な生き物に出会う経験があり、日常生活では体験することの少ない生物との接触を通じて、単なる「自然」という抽象的な理解から、より具体的な生態環境への認識へと変化していることが示されている。また、トンボやチョウの発見を契機として、子ども時代に虫と触れ合った経験に関するエピソードを語り合う場面もみられた。こうした相互の語りを通じて、それぞれが有する生物に対する認識や記憶を共有する機会が生まれたことが、参加者にとって生き物との出会いをより魅力的な体験として捉える契機となっていた。

さらに、「影のある場所は涼しい」、「山中は意外と暑くない」といった発話からは、場所による体感温度の違いが意識されていたことが読み取れる。参加前には熱中症のリスクを強く懸念していたものの、実際に歩行する過程で、森林部や日陰においては気温の上昇が緩和されることを身体的に実感し、環境条件に応じて暑さの感じ方が変化することを理解するに至っていた。このように、自然と触れ合いながら歩行した経験を通じて、参加者は気温や日差し、風通しといった環境条件の違いを身体的に感じ取るようになっていた。

4, 2, 4 人との関係性の希薄さ

また、「他の参加者との交流がなかった」、「オルレ中、人があまりいなかった」といった発話がみられた。これらは、歩行中に他者と関わる機会が少なく、体験が基本的に個人または同行者との閉じたものとなっていたことを示している。当初、学生らはオルレ中に出会うであろう同じオルレを楽しむ人々や地域住民との交流を通じて、新たな出会いや発見が得られることを期待していた。しかし、調査日においては、立ち寄った飲食店以外で他者と交流する機会を得ることができなかった。特に大島港渡船ターミナルでは、外国人来訪者に対して出身国を尋ねるアンケートポスター（図 5）が設置されていたことから、韓国人をはじめとする外国人来訪者と出会えるのではないかと期待していた学生もいたが、実際には交流の機会が得られず、落胆した様子が確認された。

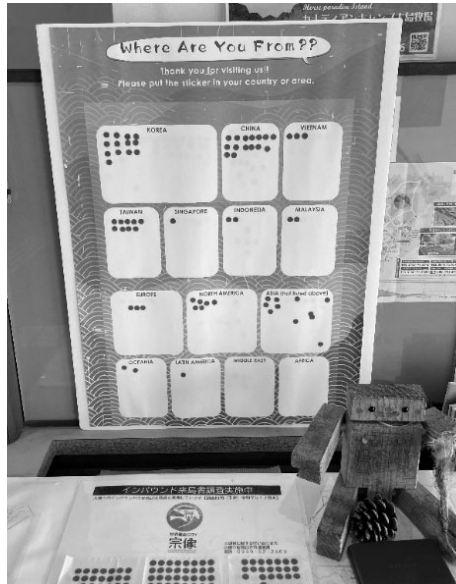


図 5 大島港渡船ターミナルに設置されていた、来訪者の出身国に関するアンケートポスター

4. 3 体験後：オルレ体験を通じて抱いた感想

4. 3. 1 身体的影響の大きさ

体験後の発話では、身体的影響が明確に表れている。「筋肉痛になった」、「キツイ」といった語が集中しており、当日限りではなく、翌日以降にも持続する負荷を伴っていたことが示される。本コースはトレッキングを含むためアップダウンが多く、普段よりも長時間にわたって自然環境の中を歩行したことが、こうした身体的負担を生じさせた要因であると述べている。一方で、「いい汗をかけた」、「ぐっすり眠れた」、「ご飯がおいしかった」、「また参加したい」といった肯定的な表現も見られ、疲労が単に不快なものとして認識されているわけではないことが分かる。むしろ、十分な運動によって生活リズムが整い、睡眠や食事といった日常的行為の価値が再認識される契機となっている点が特徴的である。

このように、オルレ体験は身体的疲労を伴いながらも、その負荷が達成感や心地よさと結びつき、肯定的な感想へと変化されていることが示唆される。

4. 3. 2 準備の重要性への認識

さらに「朝ごはん大事!」、「虫よけスプレー大事」、「水分は多めに必要」といった、事前準備に関する具体的な反省が多数挙げられた。当日は当初の予想よりも歩行に要する時間が長くなり、昼食の時間が遅れた結果、強い空腹を感じた経験が語られており、これらの体験が上記の意見につながっている。さらに、虫よけスプレーを持参していなかったため、同行者から借りることで対応したという語りや、自動販売機など水分を補給できる場所が想定より少なかったことへの言及もみられた。

これらの語りは、実際の参加体験を通して、オルレが気軽な散策活動ではなく、暑さ対策や水分・食料の確保、虫への対処など、一定の準備を前提とする活動であることが再認識されたことを示している。

5. オルレ体験が若年層の地域への関与意識に与える影響 — 関係人口の視点から

本研究では、宗像・大島オルレを体験した大学生の発話記録および付箋データをもとに、若年層がオルレをどのように受け止め、どのような意味づけを行っているのかを明らかにした。学生の語りからは、体験前には暑さや体力面への不安とともに、自然環境への興味や未知の経験への期待がみられ、体験中にはサインの発見、地形の変化、風景への気づきなど、歩行過程に特有の感覚的反応が生じていた。また、体験後には疲労と達成感が併存し、普段とは異なる環境で過ごす時間が、日常生活のリズムや身体感覚を捉え直す契機となっていた。

こうした語りを関係人口の概念から捉えると、学生がオルレ体験を通じて得た「島への関心」、「歩くことによる場所理解」、「再訪可能性の意識」は、地域との非定住型の関与がゆるやかに芽生えるプロセスとして位置づけられる。関係人口とは、地域に定住はしないものの、継続的・多様なかわりを持つ人々を指すが、学生たちの語りにみられた「また参加したい」、「別の季節も歩いてみたい」といった再訪意欲や、大島独自の自然環境への関心は地域への一時的な訪問を超えた継続的かつ選択的な関心の芽生えと考えられる。

特に、オルレが島内の複数地点を歩きながら体験する構造を持ち、歩行者が島の暮らしや景観に直接触れるプロセスは、若年層が地域の状況を「風景としてではなく、自ら歩いた身体記憶として」理解する契機を生み出す。この点は、単なる観光消費では形成されにくい、地域への“関係の入り口”として機能していると考えられる。言い換えれば、オルレ体験は若年層にとって、地域との距離を縮める最初の接点であり、関係人口としての関与が芽生える可能性を持つ体験である。

もっとも、本研究は学生 3 名の語りをもとに分析しており、若年層全体に一般化することには限界がある。今後は、対象者の属性を広げ、異なる背景を持つ若者の語りを比較することで、オルレ体験が関係人口の形成にどのように寄与するのか、より精緻な検討が必要である。また、再訪行動の有無や、体験後の地域とのつながり方の変化を縦断的に追跡することで、若年層の関心がどのように持続・深化するのかを明らかにすることが期待される。

【参考資料】

- ・入江由香子（2019）「超高齢社会を地域から支える持続可能なヘルスプロモーションー教育的支援と環境的支援ー」『東北文化学園大学大学院健康社会システム研究科 博士論文』 p6-7
- ・入江由香子, 小笠原正志（2023）「長期化するコロナ禍で繁栄する韓国済州オルレのウォーキングツーリズムーコロナ時代に苦む 20〜30 歳代の増加ー」『スポーツ産業学研究 33 巻 4 号』 p265-279
- ・小笠原正志, 中嶋健（2015）「民間非営利団体が創設し運営管理する済州島周回長距離トレイル
「済州オルレ」徒歩旅行ブームの実態」『スポーツ産業学研究』 p70
- ・岡村祐・片桐由希子（2024）「都市近郊における散策路事業の成立構造・計画思潮の変遷と縮退時代における活用可能性」『科学研究費助成事業基盤研究（C）報告書』
- ・岡村祐, 片桐由希子（2023）「ウォーキングツーリズムと地域発展の研究と研究可能性ー九州オルレの取り組みー」『ランドスケープ研究（オンライン論文集）Vol. 16』 p133-140
- ・九州オルレ公式ウェブサイト “<https://kyushuolle.welcomekyushu.jp/>”（閲覧日:2026 年 2 月 1 日）
- ・桔川純子（2019）「「観光」は社会を変えられるのかー韓国「公正観光」が拓く未来」『アジア太平洋レビュー 2019』 p34-45
- ・慶田花英太（2019）「7. スポーツツーリズムとしての九州オルレ」『産業総合研究 第 27 号』 p209-212
- ・総務省 総務省 地域力創造グループ 地域への新しい入口 二地域居住・関係人口ポータルサイト “<https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html>”（閲覧日:2026 年 2 月 1 日）
- ・平敷卓（2019）「6. 韓国・済州島観光の国際化と地域資源を活用した観光地づくりー済州島観光のインバウンド政策と済州オルレの取組ー」『産業総合研究 第 27 号』 p203-208
- ・福岡県宗像市（2025）「第 3 次宗像市総合計画」 p111
- ・宮城オルレ公式ウェブサイト “<https://www.miyagiolle.jp/about/>”（閲覧日:2026 年 2 月 1 日）
- ・李唯美（2019）「日本におけるオルレの推進」『CATS 叢書 第 12 号, 北海道大学観光学高等研究センター』 p69-85
- ・渡邊公章, 小畑博正（2015）「観光まちづくりにおける新しい公共の役割ー武雄市の九州オルレを事例としてー」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要 第 47 号』 p159-167
- ・JEJU OLLE “<https://www.jejuolle.org/trail#/>”（閲覧日:2026 年 2 月 1 日）